大学闘争の思想性

一九六八年、澎湃として起った大学闘争について、二つの見方が存在する。いわゆる全共闘派学生に対する一般社会の風当りは、非常に強いものがある。トロッキスト暴力学生・反代々木系過激分子・等々、それぞれの階級派。諸階層を代表する発言がなされている。「トロッキスト暴力学生規定」は、一般的には代々木系の人達から非常に敵対的な言葉として糾弾されている。トロッキーに代表される、謀略・分裂・煽動分子として、体制権力を刺している。そして日共を代表とする民主革命勢力の統一を阻害し分断する反革命分子として指弾している。いわゆる安田攻防戦に象徴されるように、機動隊の大学乗駐に口実を与え、国家権力の大学介入に事実上側面援助を与えたものであり、大学の「平和と民主々義」の輝しい伝統を侵蝕したものであると。又それが大学立法の呼び水として作用し、大学立法を実質的に合法化させる役割を社会的にも果させることになったのだと。つきつめて言えば、トロッキスト暴力分子の果している役目は、民主統一戦線を分断し、権力の、平和民主勢力に対する攻撃をひきだしたことによって、日本の民主革命を遠くの方に追いやり、結論としては反革命の役割をハッキリ担っているのだと。

（一部暴力学生には困ったものだ）・（何が不満であのように激しく街頭デモをやるのか）、これは一般的なノンポリの市民達の発する言葉である。日常の新聞・ラジオ・テレビ等による発言からの認識なのであろう。学生はおとなしく勉強することが殆ども大切であり、大学を占拠したり、角材をもって騒れたりすることは全く悪なのだと言う論理である。学生は未だ社会を知らないし、学問的にも未完成なのだから、政治的に発言することなく、ひたすら学問・研究に精励し自己を磨かなくてはならないと。学園を占拠し荒廃させ教授を排除し研究を停止させ、大多数の勉強したい一般学生の願いを蹂躙するなどは、学生としてなすべき行為ではないと。学生は潔く、学生本来の本分を尽くして勉強に励めばよい。又学内の矛盾は話し合いで、平和裡に進めてゆくべきであり、政治は政治家に委せておけばよいのであって、安保・沖縄・大学立法等の政治闘争はすべきではないと言うものである。おとなしく大学で卒業しさえすれば、或る程度、現社会にあって優位に立つことができ、一般的には、比較的豊かな生活環境に保障されている。又社会の指導層の仲間入りをすることができるにもかゝわらず、何で金をかけて安保反対を主張することがあろうか。

又反代々木系過激派は学園から排除しなくてはならない。その為に機動隊・自衛隊等の国家暴力を援護を使ってでも強圧すべきだ。いわゆる機動隊の合法性がでてくるのである。学生が体制批判者であってはならないし、暴力学生の大学支配を絶対許してはならない。法と秩序は、どこまでも維持されなくてはならない。そしてあらゆる、独占情報網を通じて、暴力学生――法と秩序の破壊者――のイメージを宣伝している。学生は安保のもたらす、諸々の害を攻撃してはならないし、沖縄における、労働者・農民の不満を擁護してはならない。みせかけだけの平和と繁栄を、真の平和と繁栄にする為に、暴力してはならない。学生が、人民が、教師を、権力を告発してはならない。以上が六体権力側の大学闘争の視点ではあるまいか。

大学闘争が権力につきつけた問題は深くそして根源的である。それ故にこれらの諸問題に解答し、実践することは権力の解体を意味する。権力は一般的には、歴史の残台から、スゴスゴと引き下ったことはなかった。飽くまでそれにしがみつきつゝ温存しようとするものである。古くは奴隷制・農奴制権力がそうであったし、封建性権力や近くは帝国主義権力もやはりそのとおりであった。如何に一つの権力が強固な永続性をもっているようにみえても、又あらゆる暴力装置を大衆に向けようとも、その権力が反人民的権力であるならば、とどのつまりは打ち倒されてゆくであろう。全共闘運動に対する日共からの（トロッキスト暴力集団）と云うレッテルが、いかに効果を呈そうとも、現実的にはその実体は遠い空語として葬り去られてしまうであろう。又（統一と団結）こそ美しい言葉自体、日共の独占から、再び、戦う学生・人民大衆の革命的武器として奪われてゆくであろう。真に民主勢力の破壊を意図とし圧殺する忌しい反革命の役割を果しているのは誰なのか。現在的に、実践的に、体育会学生・機動隊と一諸になって、体制権力と真に対決している学生を圧殺する為に狂奔しているのは一体誰なのか。はたして権力と戦わない革命勢力があったであろうか。歴史上でも且つてなかったし、これからも絶対ないであろう。敵に反対されない否、逆にもち上げられている、革命勢力など、およそナンセンスにすぎない。二〇世紀末日本のピエロにすぎない。日本の大学に（平和と民主々義）の伝統が果して存在したのか。日本の果してきた役割は一体何だったのか。働く人民大衆を搾取にして、帝国主義侵略を擁護し、アジア人民を奈落の底につき落した歴史は確実に存在した。権力で搾取し、人民大衆に君臨し抑圧してきた抑圧集団を教育してきた伝統は確かにあった。平和の為に大学はどの程度戦ってきたであろうか。民主々義の発展の為に人民に奉仕してきた伝統があったであろうか。残念ながらなかった。が故に権力は大学を解体しなかったし、援助すら惜しまなかった。大学は体制権力に侍女の如く媚を売りながら、面従腹背的に空虚な権威をふりかざしつゝ人民を蔑視し踏げつゝ学問を独占し続けてきたのだ。いわゆる（学問の為の学問）・（学問は超政治であるべきだ）とかまれいな言葉によって大衆を欺瞞し、結果的には体制権力の露払いの役目を果してきたのだ。須く、悪しき伝統は廃棄されなくてはならない。学問の独占は、人民大衆に解放されなくてはならない。（平和と民主々義）は単なる空論であってはならない。真に人民大衆がこれを提えたとき実体あるものとして実現されてゆくであろう。

非政治的・脱政治的であることが実際には極めて政治的なのであり、結果的には、政治の腐敗・頽廃をもたらし、政治の独占化を促進しゝゝ人民大衆の政治参加を疎外してしまうのである。全共闘運動は、その腐敗政治・そのものを大衆の眼前にさらけだしてくれたしその根源性を提起してくれたのである。

（学生はおとなしく勉強すべきだ）此の考え方は一般的には常識的にはみえる。しかし此の論理は過去において実験ずみなのではなかったか。極めて非政治的・専門白痴的勉強を強いられていたが故に、帝国主義の侵略戦争の非人間性にすら気がつかず、あのアジア人民の殺戮行為すら合法化してしまったのではなかったか。又反戦闘争も起り得ないような社会秩序を許容していったのではなかったか。いわゆるファッシズム態勢を許していったのだと思う。学生はおとなしく勉強する、労働者はおとなしく労働する、そのような社会秩序を永遠に維持するならば、勿論騒乱も起り得ないであろうし、体制権力にとっては非常に好ましい状態だと云える。だがしかし、それがファッシズムに突き進んでゆく危険が非常に大きいのだ。それぞれの分野につく前に、学生も労働者も一個の人間であり人格だと思う。又民主々義社会においては、それぞれ政治の主権者として、政治に対し批判者であらねばならないし、発言者であらねばならないだろう。又そうであるからこそ社会の不正を防止し、正常な社会の発展を保障することができるのである。汚職があれば摘発し糾弾し、政府が帝国主義的・人民抑圧政策を強行・志向するならば、学生・市民を問わず反対の行動をとらねばいけないのだと思うのだ。絶対する権利・行動する権利は学生におろし勿論一般労働者にも存在する。政治的な発言だから、政府を攻撃するから、との理由で言論・表現の自由を圧殺するならば、社会の正しい発展は阻害され、ひいては人民大衆の基本的権利を押し殺してしまう。巨大な暴力装置を具備する体制権力からこそ、言論は極めて自由でなければならない。言論の自由は、戦う学生や、人民大衆から侵されることはあり得ないことを知るべきである。

（法と秩序は、破壊してはならない）と云う。だけれども、その（法と秩序）が非常に人民を抑圧するものであるならば、改革されなくてはならない。（法と秩序）も所詮は人間の幸福のために存在するものなのだ。それぞれの本分を尽くす前に人間であればならないだろう。ベトナム

戦争は極めて、非人道的な帝国主義侵略戦争であるからこそ、アメリカ帝国主義の即時無条件撤退を要求するものであるだろうし、安保・沖縄もそれに関連しアジア人民収奪の要であるが故に、その粉砕・奪還を要求するのであろう。基地公害・独占による諸々の地域公害が非常に人民の日常生活の幸福を収奪・阻害するが故に、反対せざるを得ないのだ。又その反面、安保・沖縄・基地を持続させることによる利益集団は、人間の名において納得しなければならない。圧倒的人民大衆の犠牲の上にぬくぬくと尊大に（あぐら）をかいて算盤をはじいている死の商人達に対する指弾は当然に行なわれなくてはならない。大学闘争の中に脈々と流れている、この人間主義は否定されてはならないし、単なる表面的ゲバルト現象だけをみて非難されてはならない。

機動隊導入――封鎖解除――ロックアウト――授業再開、大学正常化の道は大体このように設定されている。又それが学問の自由であり、大共闘派学生を機動隊暴力で追放し、おとなしい学生・教職員達で構成する大学は、もはや体制権力を批判・告発することもなく、ラジカルな問いかけを社会に発することはないであろう。又そこには学問の自由は存在しなくなり、恐れ・おのゝきのみ存在する、帝国主義大学に変質してゆくであろう。機動隊暴力に殴打ちされた学園は、人民大衆の利益を阻害し、正常な社会の発展を圧殺してしまうであろう。

大学の機動隊アレルギーを解消した権力は、今後は直接的に人民大衆にその鋭い矛先を向け、民主的諸権利を剥奪する為に狂奔するようになるであろう。幾多の尊い血潮で勝ちとられた民主的諸権利は、うたかたの如く奪い尽されることは、火をみるよりも明らかなのである。学問の自由や大学の自治は、機動隊には絶対守り得ないものなのである。学問の自由は、そのものを侵犯することから、学問の自由は脅られなければならない。政治を批判することは自由でなければならない。そのことを完全に封殺することから、ファッシズムの台頭が始まるのである。暴力学生を排除したことが、大学の自治・学問の自由を保障したことには絶対にならないし、体制権力がそれを保障する訳のものでもない。体制暴力をゆるがさない限度においての学問の自由・大学の自治は存在するかも知れないが、ひとたび権力批判をすることになれば絶対に容認しないであろう。学問は自由であり、言論・結社・集会・表現は自由であらねばならない。何故であろうか。一人一人が一個の人格としての尊厳がある為には、此のような自由はなければならない。それは永い永い人間の歴史が到達した結論なのである。そのことが保障されて人間の解放が可能なのであり、人民の幸福が可能なのであろう。人間の大多数を不幸におとし入れることに反対するのは、正義の戦だと言える。その反対がなければ人間を不幸にしてしまう。即ち反対することが善であり、反対しないことが悪なのである。如何に体制権力が全共闘運動を、力づくで圧殺しようとしても、全共闘内部に強い人間主義と、人民解放の思想が存在する限り圧殺し尽くすことはできないし、その思想は人民内部に浸透しつゝ圧倒的共感を得るであろう。又ひとたびその思想を大衆が捉えたならば、人民戦争の大海原は、権力そのものを破壊して行くであろう。

歴史は戦う学生のものであり、人民大衆のものである。

「研究・教育の内実」

電気工学科

過去より現在まで一貫して実施されてきた私立大学、特に私が奉職する明治大学工学部の研究・教育について語れる言葉は、研究教育と云う名のもとにえせ研究者「教育者」の社会生活の基盤を保障し、学生として完全に資本主義体制の要請に迎合した労働者「中堅技術者」を極端的に拡大再生産していたのである。

私たちもその中の落し子であると同時に、悪しき工学部の研究・教育に従事し、その機能の一翼を担ってきたことは、明白な事実である。これが故にその現況を語ちかに訴える必要があると思う。

研究について

まず研究体制・基盤を確立していないこと。設置すれば教授を始めとして、教員全数に応じて一定の自己を生涯保障する確固たる信念あるいは思想の欠如、真に学問研究を志向する資質が不十分であり、研究活動を強力に忍耐強く遂行していく気概が欠落している事である。

次に研究設備と資金の貧弱さ、少なさである。私立大学の場合、創立当初創立者個人の財源または神財で賄われてきたが、戦后教育の機会均等の理念から導かれた民主化教育によって多数の学生を包摂し、特に理工学部においてイノベーション、工業化時代に答える技術者養成のため学生急増の必要が生じた。その結果として大学の財政規模は徒らに拡大したが、逆に研究者一人当りのそれらは益々不足をきたしている。以上の如き現状から大学での本当の若手研究者は養成されず、また大学自体もそれをほとんど期待していないが故に相対的に常時若手研究者の不足を招来した。

研究者の経歴として、教授層の大半は官立大学、大企業の停年退職者を招聘し、あるいは公立の研究所で延び悩んだ中堅研究者を迎え形だけの研究スタッフを羅列して、まがりなりにも電気科の研究体制を維持してきた。その研究の内実として形骸化した教授層は大学において研究活動にほとんど従事しないか、学位を得、将来の自己の身分保障のためにのみそれを為し過去の研究業績を唯一の武器として独占し、君臨した。そして私たち実験助手を自己の研究室に固定化させ、将来の職を保障するという名目の下に研究室の一切研究改育業務の指導・補助を為さしめた。実験助手達が独自に自発的に研究を推し進めようとするのに対し、経済的圧力を加える、発表の自由を与えない、発表の場が与えられたとしても教授自身の実績となるような連名と云う形においてのみ可能である。強引に単独で発表した場合、強権的な方法で日常的にその本人に圧力を掛けてくる。

実験助手の研究に対する姿勢はその原因結果は別にして、自律的でなく、不安定である。その研究はあくまで担当教授の専攻分野枠内で、外に発展深化せず、相互批判、使嗾する意識がほとんどない。その為徐々の勉強の一助として数年間の契約で研究室に残り、研究と云うものを偽曲化した形の技術を修得し、研究者としてよりも現在企業体が要請している若手高級技術者の資格で企業または私大に転職する。痛感せざるを得ない点は、従来から大学において「研究とは」「……」等々の本質的問題について少しの疑問もはさまず、皮相的な課題すなわち「ある研究に対する興味を持つ」「この研究は金がほとんど掛らずに短期間に成果が上がるのだ」「何か研究らしき真似事をしていれば毎日が過ごされるのだ」とか云う誠に素朴で幼稚な、逆に表現すれば不真面目な態度姿勢にほとんど終始していたのである。

教育について

工学部拡充計画により、昭和三九年から四〇年に亘って神田地区校舎から生田地区に新校舎を建設し、移転した。神田地区において新設の工学部は、諸校舎に無秩序に分散・在在していた教室実験室等を一箇所へ整理統合したので、外見的には一応整備し便利になる。しかしながら、その内容は、学生数の急増、常に教員数の漸性的な不足、その結果教育効果の質的低下をもたらす。例として昭和三四年一学年の学生数約一三〇人、教員数一〇（実験助手をのぞく）人に対し、八年后の昭和四二年前者は約三〇〇人、後者は一四人に増員され、電気科学生の専任教員一人当に対する学生数は約五二人から八〇人となり、学生の指導接触を益々粗雑・無様にならしめる原因を生じた。その対応策として係節操な形で実験助手の員数を増加せしめその教育活動の補充の性に当てたのである。

また神田地区での現居性を払拭するために各教授の個室とその研究室を分離して教授の教育研究に関して一線を画し、研究室の学生・院生・